

女性臨床心理士のキャリア選択

— 結婚・出産・育児に着目して —

曾山 いづみ*・岡村 梨央**・中村 春華**

(*奈良女子大学大学院生活環境科学系・**奈良女子大学大学院人間文化研究科)

要約：本研究では、女性臨床心理士が結婚・出産・育児を経験する中で、自分自身の生き方や仕事、働き方といったキャリア選択をどのように考えているのか明らかにすることを目的に、インタビュー調査を行った。具体的には育児中の女性臨床心理士3名に対するインタビュー調査から、事例的にキャリア選択のあり方を提示した。協力者たちはそれぞれの時期で様々な選択を行っており、葛藤を感じるタイミングも異なっていたが、色々なバランスの中でベストと思える選択を意識的に行おうとしていたこと、葛藤はありながらも自分自身の選択を「よかったもの」と意味づけられるように努力していることが見出された。この背景には、協力者たちが、現在や近い将来といった近景のキャリアと、長い人生における生き方や仕事の仕方といった遠景のキャリアの両方を視野に入れていることが意味を持つと考えられた。また、このような考え方は臨床心理士の専門性の発達にも寄与していると考えられた。

キーワード：女性臨床心理士, キャリア, 結婚, 出産, 育児

問題と目的

(1) キャリア選択の重要性

1億総活躍社会が謳われ、人生100年時代と言われる現代社会において、キャリア教育やキャリア支援がますます重要になっている。その中で、キャリアという言葉の意味もより広がっている。

広辞苑では、キャリアを「①(職業・生涯の)経歴。②専門的技能を要する職業についていること。③国家公務員試験Ⅰ種(上級甲)合格者で、本庁に採用されている者の俗称。」と定義している。一方で、柏木(2015)は「キャリア=自分がどう生きるか」とし、「キャリアプランとは、狭義の職業選択に限らず、自分がどう生きるか、何をもって自分が生きた証となるかを十分に考える、そのうえでその生き方を貫くことができる結婚をする、また出産・育児で自己資源を消耗しつくしてしまわないようにする。そのために、配偶者の生き方を冷静に見定める、その資源を有効に活用する、そのような人生の設計を前もってきちんと考え、そうした生き方を共有できる人を同行者・配偶者として

選択することが肝要である」と論じている。高橋・石津・森田(2015)は、柔軟性、レジリエンスを兼ね備えたキャリア観が必要であるとして、近年のキャリア理論を発展させた「ライフキャリア・レジリエンス」を提唱している。「ライフキャリア・レジリエンス」は、不安定な社会の中で自らのライフキャリアを築き続ける力であると定義されている(高橋ら, 2015)。このように、単なる職業選択にとどまらず、自分の生き方をどのように考え人生の舵を取っていくか、という視点でキャリアを考えていくことが求められている。その中で、女性のキャリア、育児期女性のキャリアについての研究や、それぞれの職種におけるキャリアについての研究も積み重ねられてきている。

(2) 臨床心理士としての専門性発達

臨床心理士をはじめとした心理職については、専門性発達という観点の研究が蓄積されてきている。

たとえば、子育てと臨床活動のつながりをとらえようとする研究に、山口・岩壁(2012)が

ある。山口・岩壁（2012）は育児中の女性臨床心理士へのインタビュー調査を通して、母親であることで子育て期の母親クライアントに対する理解や実感を深める一方で子育てに費やす時間や労力によって身に着けた専門性を維持・発展させることに困難を覚えていること、臨床の専門性によって我が子への見方やかかわり方が柔軟になった一方で自身の至らなさに罪悪感を覚えること、時間に追われるときに自己省察の波にのまれてしまうが、それを受け容れることで母親としての体験を臨床活動に活かしたり専門的な視点を我が子とのかかわりで活用できるようになることを描き出している。

また、熟練臨床家へのインタビュー調査から心理臨床家の専門性を探求した浅原・橋本・高梨・渡邊（2016）は、臨床家、あるいは心理士としての発達においては、個人的な経験も重要であることを指摘している。プライベートな人生経験が、クライアントに対する理解を深めるきっかけになりうることは、数々の著名な臨床家たちも指摘しているところである。

(3) 本研究の目的

一方で、結婚・出産・育児という変化を経験する中で、働き方（職種、仕事内容、仕事時間など）をどのように選んでいくか、自分自身のキャリアをどのように考えていくかに焦点を当てた研究はあまり見られない。そこで、本研究では、今まさに育児に奮闘していると思われる、第1子を出産後3年以内の女性臨床心理士に焦点を当て、キャリア選択をどのように考えているのか、迷いや葛藤、キャリア選択における諸要因にはどのようなものがあるのか、丁寧に検討していくことを目的とする。

方法

(1) 研究方法の選択

女性臨床心理士のキャリア選択における様々な要因や悩み、葛藤、よかったことなどを幅広く聴取するためには、質的方法、特にインタビュー調査が適していると判断し、採用した。

(2) 協力者

本研究の目的に鑑み、臨床心理士としての勤務経験があり結婚・出産を経験している人、かつ子どもが3歳未満である人を調査対象とした。具体的には、第一著者の知人を通して研究協力を依頼し、承諾された3名にインタビュー調査を実施した。サンプリングにあたっては、従事している領域や常勤非常勤の別など、可能な限り幅を持たせるように努めた。調査協力者の一覧を表1に示す。なお、協力者や子どもの年齢などはいずれもインタビュー時のものである。

表1 協力者一覧

名前	年齢	大学院 修了後	子どもの 年齢	現在の主な職場
A	36歳	11年	2歳	学生相談（非常勤） などかけ持ち
B	35歳	11年	2歳	企業（非常勤）
C	29歳	5年	1歳	児童相談所 （常勤、育休中）

(3) 調査手続き

インタビューは、協力者と著者らの時間、距離的な都合を鑑み、zoom（インターネット回線によるビデオミーティング）もしくは対面で実施した。zoomインタビュー（Aさん、Cさん）の際は、著者らは第一著者の研究室から、協力者は協力者の自宅からそれぞれ回線をつなぎ、カメラ（視覚情報）と音声（聴覚情報）両方を用いて実施した。対面インタビュー（Bさん）の際は、プライバシーの保たれる貸し会議室にて実施した。

インタビューは、2019年2月～3月に行われた。基本的に著者3人が揃う中で実施したが、時折第二著者か第三著者が席を外することがあった。第二著者あるいは第三著者のどちらかがメインのインタビュアーを担い、適宜他の人が質問を挟む形でインタビューを進めた。インタビューに要した時間（事前や事後の説明時間を除く）は55分～122分であった。

質問項目は以下の通りである。ただし、語りの内容や流れによって適宜順番を変えたり、より詳しく質問することがあった。①フェイス

シート項目（年齢、経験年数、現在の仕事）、②心理職を目指した理由、きっかけ、③心理職として働き始めてから現在に至るまで、④結婚による変化、悩み、よかったことなど（仕事面、プライベート面）、⑤妊娠・出産・育児による変化、悩み、よかったことなど（仕事面、プライベート面）、⑥心理職でよかったと思うこと、⑦心理職で大変だと思うこと。

(4) 倫理的配慮

本研究の目的を文書と口頭にて説明し、録音の許可、研究結果公表の許可を得た。インタビュー中に出てきた固有名詞は逐語録作成の段階で削除した。また、事例を公表するうえで、協力者が特定されないよう、細かな事情は適宜改変を加えている。

(5) 分析手続き

インタビュー調査の逐語録を作成し、それを分析対象とした。研究協力者が3名と少ないこと、協力者の経験も多様であることから、語りをカテゴリー的に分析するよりも事例的に見ていく方が各協力者のキャリア選択に至る道筋が見えやすくなると判断し、事例ごとに丁寧に分析していくこととした。

具体的な手順として、まず逐語録を詳しく読み込み、それぞれの協力者の語りと経験を深く理解するよう努めた。次に、結婚に至るまでの状況、結婚、妊娠・出産、復職とその後、の段階に分けて整理し、各段階における「選択」とはどのようなものであったのか、検討した。

結果

ここでは、協力者の語りを引用しながら、それぞれの経験について、結婚前、結婚、妊娠・出産、復職とその後という順でまとめていく。特に「選択」やそれにまつわる葛藤について厚く記述していく。

(1) Aさん（大学院修了後11年）

結婚前：Aさんは中学生の頃に読んだ本をきっかけに心理職に興味を持ち、資格のとれる大学院へと進学した。大学院時代に、複数名から「最

初はとにかくアセスメントができるようになった方がいい」とアドバイスを受けたことに納得し、修了後は精神科のクリニック、児童相談所の心理判定員などをかけ持ちし、最初は主に心理検査業務にあたっていた。だんだんと心理面接やグループを担当することも増え、落ち着いて面接に取り組みたいと思うようになっていった。

結婚：心理士として働き始めて3年程した頃結婚した。相手の仕事には転勤があり、当初は夫の転勤先で心理職として働いていこうかとも思ったが、実際に転勤が決まったときには少し気持ちの変化があったという。仕事も、落ち着いて面接のできる学生相談の場をメインに移した頃でもあった。「（転勤先で）その場限りの心理の仕事をしようっていうよりは、もう少し自分の心理のキャリアを積み重ねていくみたいなことを考えたいと思うようになっていた」「（その場限りの仕事を重ねていくことは）なんか自分の生き方としてあんまり良しとできないなって、よく考えたら思った」そうで、夫との生活と自分の仕事をどうやって両立させられるか考え、平日は仕事のある関東で、週末は夫のいる転勤先で過ごすという往復生活を始めた。一方で、結婚したことで経済的に安定したという変化もあった。それによって「待遇をそんなに考えずにやりたい仕事を選んでこられた」と感じている。

妊娠・出産：妊娠中も仕事を続けていた。妊娠中は「頭がパンパン」でとても眠く、やらないといけないこともなかなか進まない状況だった。メインの職場は、非常勤で金銭的な保証はなかったが、休業の期間はある程度自由に決めるという状況だった。

復職とその後：産休・育休後は短時間勤務ができたため、4ヶ月で復帰した。産後も頭がパンパンで、夜も寝られず、「身体もしんどいしホルモンバランスもなんかぐちゃぐちゃ」でありとあらゆることが大変だったというが、早い時期から少しずつ復帰できたことはAさんにとってはよかったという。時短勤務から始められたことで、身体面のしんどさはあったが、罪悪感を覚えすぎることなく仕事をするのができた。仕事の間では、大人と会話ができることやご飯

をきちんと食べられることもありがたく感じられた。長めに育休をとることも考えたというが、「それは多分余計置いてけぼりって勝手に感じてしんどくなってただろうなって感じがする」と語っていた。

今後の仕事をどうしていくかについて、現在色々と考えている最中である。「安定して育ていくためには常勤職の方がいいかなって思ったり、でもそうすると子どもにける時間も減るから難しいなと思ったり」するそうで、「仕事を今後どういう風にしていくかっていうところは数年単位で考えて」いこうとしているところだという。子どもがいることで、保育園のこと（常勤であれば認可保育園に入りやすいが非常勤だと認可外になる可能性も高く、そうなると保育料も高くなる、など）、小学校進学後のことなど考えなければいけないことも増えている。魅力的な仕事があっても、通勤や拘束時間などの条件が合わずにチャレンジできないこともあり、「選択の幅がすごく狭まるような気がして」いるという。同様の状況でも果敢にチャレンジしている人もいると思うも「なんかそんなに頑張れないぞっていう感じ」がしてしまい、「なんかみんなみたいにバリバリできないみたいな葛藤はあるかな。葛藤っていうかなんかちょっとウジウジしちゃう感じ」と語っている。一方で、その葛藤やモヤモヤをただそのままにしておくのではなく、「この状況だからこそこかできないかなみたいな、そんな感じでまとめようとしている。それですっきりやれているかっていうとそうではないこともあると思うけど」と、現在の葛藤を何かしらいい方向につなげられるようにということは強く意識しているという。Aさんはまた「やりたい仕事があり、それをやれていて続けられているっていうのはすごく恵まれているというラッキーなんだろうなって思って」いるとも語っている。日々大変なこと、葛藤したりウジウジすることはあっても、全体として「やりたいことをできている」という感覚を持っていることが重要であると感じられた。

(2) Bさん(大学院修了後11年)

結婚前：Bさんは小さい頃から「生きづらさ」

を感じているだろう子たちのそばにすることが多く、「親和性」を感じていたという。中学生の頃には心理系の本を読むなど、心理学に興味を持つようになっていた。大学で心理学を専攻し、そこで人柄に惹かれた教授のゼミに入り、その教授とつながりのある先生がいる大学院に進学した。大学院修了後は研修で行っていた小児科で非常勤心理士として勤務し、発達検査や面接などを行っていた。同時に精神科の研修で経験を積んだ。非常勤をしていた小児科が提携している小学校でスクールカウンセラーをしたり、指導教員の紹介で家族支援のグループに参加することになったりと、徐々に仕事の領域が増えていった。その家族支援のグループを主催している相談機関は産業領域のEAPも請け負っており、産業領域の個別相談や予防教育にも徐々に携わるようになっていった。大学の非常勤講師も数年担当し、「いろんなところでちょこちょこかじりながら、バタバタ必死に動き回るみたいな感じのことをして」いた。もともとは紹介してもらって入った仕事から「自分がいいなって思うところと地道にやっていく中で使えるねって思ってもらえてっていうところの間を徐々に徐々に広げていったっていう感じ」だったといい、それぞれの場所での縁を大切にしながら仕事の幅がぐんと広がっていった。

結婚：Bさんは関東で仕事をしていて、結婚相手は別の地方で長らく働いており、結婚にあたってBさんはほぼすべての仕事を辞めて(一部の仕事は年単位での引継ぎをしながらであったが)、夫以外に知り合いのいない土地に引っ越すこととなった。夫の仕事は簡単に転職ができる類のものではなく、結婚・同居するならBさんが引っ越すという選択肢が現実的であった。しかしそれは、今まで大事に積み重ねてきた縁や仕事など「何もかも捨ててというか、もう全く違う人生を歩むんだくらいの決意」だったという。そのような決意ができた背景には、夫はしんどいときにサポートしあえる相手だと実感でき、互いにそう思える相手と出会えることはなかなかないと思ったこと、今まで仕事を続けてきた中で「ある程度やっていけるなっていう感覚」を得られ、自分の力をしっかり試しなが

ら心機一転やっていこうと思えたことなどが大きく影響していた。結婚してよかったこととして、「一番は老後を考えての安心感」があったといい、「非常勤をかけ持ち食いつなぎみたいなの」働き方と比べて経済的な安定感も得られることとなった。夫はさりげなく気持ちを汲んでくれるような言葉かけをしてくれる人で、精神的にも支えられている。結婚、引越後は時折引継ぎの仕事をする以外は家にいる時間が長くなった。新しい土地になじむことにまずエネルギーを注ぎ、結婚式の準備をしたりきょうだいの結婚準備を手伝ったり、時間をかけて家事をしたりと、家族のために時間を使うことができた。一方で、社会とのつながりがない心もとなさも味わうようになった。専業主婦になる選択肢も考えた一方で、臨床心理士になるためにかけてきた時間やお金や労力、そして今まで積み上げてきた経験をまったく0にしてしまうのはもったいないとも感じ、「ゆるゆると仕事を探してみるかという気持ちになり」、仕事を探し始めた。結婚前から産業系の仕事に携わるようになっていたこともあり、募集の出ていた地元の企業で週2回、心理職として働き始めた。

上述の通り、Bさんにとって結婚はとても大きな「選択」であった。以前にも結婚を考える機会はあったというが、そのときには結婚してガラッと生活を変えるよりも、自分の学びや仕事を優先させたいという気持ちが勝り、結婚には至らなかったという。仕事の出会い、人の出会い共に「自分でいつ出会いたいと思って出會えるものでもない」ため、Bさんは「自分の時間的年齢的な制約やいついいものが降ってくるかわからないタイミングみたいなものとの間で、より良いものをなんとなく、良いものが来たら逃がさないってというようなことは意識しつつ、選択していったみたいな感じ」だったと語る。何かを選択することは何かを捨てることでもあったが、「とった選択の中では自分自身が後悔したくないなっていう思い」もあり、「その都度その都度自分が心から惹かれるものにとりか、自分が取りたい選択は取ってきた」と思っている。

妊娠・出産：Bさんはもともと子どもが欲しいという気持ちが強く、妊娠することへの葛藤

は全くなかったという。地元企業で働きはじめて間もなく妊娠がわかった。非常勤の立場で産休育休などはなかったため、出産を機に一旦退職することとなった。その企業には心理士が複数名勤務しており、Bさんは同僚の心理士たちととてもいい関係を築いていた。退職後も同僚たちとのつながりは続き、産後も時々行き来するような付き合いをしていた。産後は家の中で子どもといるだけの生活が中心となっていたBさんは、だんだんと仕事をしたいという気持ちが大きくなり、その思いを伝えたところ、「B梓はとってある」「いつでも戻ってきて」と言われ、子どもが保育園に入りやすい年度初めのタイミングで仕事に復帰することになった。

復職とその後：産後1年弱でBさんは復職した。地域的に勤務時間が少ないと保育園入園が難しく、企業側の雇用条件もほぼフルタイムの形しか望めなかった。本当は週2~3日の短時間勤務を理想としながらも「自分の中では仕事をしたい、一旦離れると感覚が鈍るなっていう感じがあるので、0か100をとるなら100の方をとろうと決心」し、現在は週5日でほぼフルタイム（可能な限りの制度を使って若干の時短勤務をしている）という形態で働いている。会社制度としてはサポートが薄い一方で、同僚には育児経験のある人や育児中の人も多く「人っていうところでのサポートはすごくある」という。生活を回していくのは本当に大変だが、色々工夫を凝らして「できることはあきらめないようにして」おり、「家庭をうまく回していくそのマネジメント能力みたいなところはきっと仕事にも活きるなみたいなのは確かに実感としてある」と感じている。Bさんは様々なバランスの中で「選択」してきた現在の生活を最大限いい方向に持って行こうと努力しており、それがうまく回っている実感も得ているようであった。

(3) Cさん(大学院修了後5年)

結婚前の状況：Cさんはもともと子どもが好きで、教師など子どもにかかわる仕事をしたいと考えていた。だんだんと児童虐待の問題が顕在化してきた頃で、虐待のニュースを見聞きするたびに色々考えることも多かった。実際に進

学を考える時期になり、教員養成の大学以外でも教員免許は取れるとアドバイスを受け、教員養成専門ではない大学に進学した。その中で「個々の困っている子だったりとかその子を取り巻く家族だったりとかそういったところにアプローチしていく」ことに興味を持つようになり、心理学を専攻した。大学時代から児童相談所の一時保護所でアルバイトを始め、虐待を受けた子どもたちと関わる大変さと同時にやりがいを感じるようになった。虐待に携わる仕事の大切さを実感したことで福祉領域への志を強め、大学院修了後は公務員の心理職として児童相談所で働き始めた。児童相談所では敵対的な保護者と向き合う機会が多いこと、きっちり決まった時間や場所などの枠がない中で進めていかざるを得ないことなど、難しさを感じることも多いが、子どもの変化を如実に感じられることがやりがいにつながっているという。「虐待を受けてきた子とかだと、本当に会ったときってすごく表情も乏しかったりとか、あとはなんだろう、すごく固かったり、とげとげしい感じがあったりとかっていうのがあるんですけど、関わっていくうちにだんだん本当に顔が変わってくる、なんか全然別人のようにやわらかい顔つきになってくれたりとか、表情が出てきたりとかっていうのを見るとすごく良かったなって」思うと語っている。Cさんは児童相談所で働きたいという気持ちが強く、常勤でしっかり現場に入るという働き方を求めていることもあり、転職を考えたことはなかった。保護者対応では「心をえぐられるような」体験をすることも多かったが、同僚職員たちの支えもあり、この仕事を続けていきたいと思っている。

結婚：Cさんは結婚後も同じ職場で勤務を続けた。結婚自体を迷うことはなかったが、色々な問題を抱えた家族と関わるが多いという仕事柄、結婚に伴い苗字が変わったことを相手（担当している子どもや家族たち）がどのように受け止めるのか気にはしていたという。働き方なども特に変化はなかったが、フルタイムで働きつつ家事はほとんどCさんが担っていたこともあり、「同じような立場である人への共感のベースみたいところは、少し引き出しは増え

た」と感じている。「妻」という立場が増えたことで、担うことや考えることも増えたが、愚痴を言いやすくなるなど支えられることも増えたと感じている。

妊娠・出産：入職して3年を過ぎた頃に妊娠がわかった。結婚時と同様に、担当している子どもや家族が妊娠をどう受け止めるかというところは悩んだ。公務員という立場上、数年で担当者は交代していくことになるが、Cさんが産休に入ることで「その子からすれば1回余分にセラピストの交代を強いられることになる」と感じ「実際ケースによっては、私が産休に入ることによって話をしたときに、荒れはしなかったけどその場で結構面接中、固まっちゃったりとか、泣かれちゃったりとかあった」という。他にも、業務の1つとして当番制で24時間対応用の携帯電話を持たなければならず、妊娠中はその対応にしんどさを感じることも多かった。しかし、夫と話してリフレッシュできたり、次の日職場で同僚職員に愚痴を言えたりと、家庭と職場の人間関係に支えられて「メンタルが持っている」と感じていた。

公務員のため産休育休の制度は整っており、Cさんは2年半育休を取得することにした。妊娠中に休職期間を報告する必要があったため、早い段階から育児や仕事のバランスをどうしていこうか考えていたという。そろそろ異動というタイミングで産休に入ったため、まずはもとの職場に復帰し、年度末のタイミングで新しい職場に異動できたらと考えている。しかし、育休中の今も葛藤は色々あるという。「現場から離れちゃうわけじゃないですか、そこで感覚、現場感覚が鈍っちゃうのが嫌だなあっていうのは今も正直あるし、あとは、そうですね、あとそれこそ今後復帰とかって考えた時はたぶん今まで通りの働き方はできない、うん。今までだと、本当に残業当たり前の世界なので、全然平気で残業してたんですけど、これで復帰しちゃうと、たぶんもう残業とか出来ないし、残業どころかたぶん定時よりも時短で勤務させてもらわなきゃいけないかもしれない。そういうところでは、職場に迷惑かけちゃうかなっていうのと、あとは自分自身もやっぱり働きたい気持ち

もあるので、思い通りに働けないっていうところのもどかしさみたいなのはありますね」と語る。人事異動についても希望通りになる保証はないが、制度の中で働き方を調整して、いずれまた児童相談所でしっかり働きたいと考えている。折々で業務の負担を感じたり育児と仕事のバランスで悩むことがあっても、就職前からの「児童相談所で働きたい」という意思は変わらずに、強い芯となっているようであった。

考察

本節では、まず「キャリア」を「選択」するとはどういうことか考察していく。次に、臨床心理士としての発達の観点から、協力者の経験の意義を検討する。最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。

(1)「キャリア」を「選択」することとは

上述の通り、3人ともそれぞれのタイミングで色々なことを考えながら、様々な「選択」を行っていた。本研究では主に仕事の内容や勤務形態、結婚の相手やタイミング、結婚後の生活様式、産後の働き方についてまとめたが、インタビューで語られなかったこと、聞ききれなかったことも含めるともっと多くの選択を行っていると考えられる。特に非常勤としての勤務歴が長く、結婚後の生活の変化も大きかったAさん、Bさんからは、優先順位、バランス、制度の幅、自分の希望…から、今の自分にとって一番いいと思えるものを選ぶようとする姿勢が強く感じられた。Cさんも「児童相談所で働く」という強い芯があり、その中で折々の自分にとってベストだと思われる選択をしている様子がうかがえた。

一方で、「選択」はすべてが思い通りに行くわけではない。Bさんが語っていたように、何かを選ぶことは同時に何かを捨てることであり、自分の選択や現在の状況に対して、3人とも多かれ少なかれ葛藤も感じていることが語られていた。その中で特徴的なのが、AさんやBさんの語りにあった「後悔しないようにする」「何かの形で次につなげようとする」姿勢である。自分の選択を、意識的に「後悔しないよう」意味づけていこうとする姿勢には、自分の選択に責

任を持つという覚悟が感じられる。柏木（2015）は、キャリアプランとは「狭義の職業選択に限らず、自分がどう生きるか、何をもって自分が生きた証となるかを十分に考える」ことであり、結婚にあたっては自身の選択を貫くことができるような相手を選ぶことが肝要であると論じている。「貫く」というと冷たく固い印象も受けるが、AさんやBさんの語りからは、その時々自分の自分にとって何が大事か、1つ1つ丁寧に考え、答えを出そうとするしなやかな強さが読み取れる。Cさんもまた「児童相談所で働く」という芯は変わらずに持ちながら、短期的に働き方を調整することも考え、柔軟に動こうとしている。では、なぜ協力者たちは、そのような柔軟さや前向きさを失わずにいられるのだろうか？

1つには、どの程度の時間展望でキャリアを考えるか、ということがあるだろう。3人とも、現在や近い将来にどうしたいか、という近景のキャリアと、長い人生の中で自分がどうしていきたいかという遠景のキャリアという両方の視点を持って自身の生き方を考えていた。遠景のキャリアを展望に入れることで、今現在は多少不本意な形であっても、将来的に本来の望みに近づくことを目指すことや、今の時点では葛藤であっても長い目で見れば「貴重な経験」になりうると思うことができると考えられる。

一方で、すべてを個人の力によるものと帰属させることにも注意が必要だろう。結果で示した3人の状況は、色々と微妙なバランスのもと、協力者たちの持つ柔軟さ、前向きさを始め様々な努力があって成り立っているものであり、何かが違っていたら今の状況にはなっていなかっただろうことは、それぞれが語っていた。また、夫よりも妻である協力者たちに現実的な負担が降りかかる場合が多いこと、出産でブランクが生じるのはどうしても女性の側でその不平等さを感じないわけではないことなども語られており、皆が自分の望む生き方をそれなりにかなえられるようになるためには、労働環境や社会構造についても考えていく視点も忘れてはならない。キャリア選択を考えていくうえでは、個人の経験レベルと社会構造レベルの両方から検討を進めていくことが必要である。

(2) 臨床心理士としての発達

ここでは、結婚・妊娠・出産・育児やそれに伴うキャリア選択が、心理士としての発達にどのような意味があったのか検討していきたい。

結果ではきちんと触れられなかったが、妊娠・出産・育児を通して、3人とも母親の立場への理解が深まったこと、チャンネルや引き出しが増えたことを「よかったこと」として語っていた。一方で、母親の立場に肩入れしすぎてしまうことによって、中立的な立場でいることの難しさもあるとしていた。これらは山口・岩壁 (2012) などの指摘に一致するところである。

もう1点、前項で論じてきた葛藤や「うまくいかなさ」を活かそうとする姿勢も、臨床心理士としての発達に寄与していると考えられる。熟練臨床家へのインタビュー調査から心理臨床家の専門性を探求した浅原・橋本・高梨・渡邊 (2016) は、臨床家個人のあり方が専門活動と切り離せないことを指摘し、専門性の中核的特徴として、①専門性の中心は臨床実践に臨む姿勢にある、②その中核的要素は、自らが臨床的にかかわる対象の主体性を最大限尊重しようとする姿勢にある、という見解を提示している。協力者の語りからは、自分自身が辛い状況に置かれることで、クライアントの経験する無力感や絶望感を感じ取る一助や、理解の参照枠の1つとして活かそうとする様子が語られていた。それらは決して「同じ体験をしたからわかる」という類のものではなく、理解のチャンネルの1つが増えたというような言い方をされているのが特徴的であった。個人のあり方や相手に向き合う姿勢によって支援の質も決まりうるという臨床心理士の仕事において、キャリアを選択していくうえでの葛藤や難しさを経験することも意味があると言えるだろう。逆に言うと、「個人のあり方が大切である」という心理士の専門的な考え方が3人に根付いているからこそ、それぞれ苦しい状況にあってもそれを前向きにとらえることができているのかもしれない。

(3) 本研究の意義と今後の課題

本研究は3人へのインタビュー調査から、女性臨床心理士のキャリア選択について事例的に

検討してきた。今まで論じてきたように、キャリア選択には様々な要因が微妙なバランスで絡み合っており、何かが1つ異なれば現在の状況も異なっていたと考えられ、知見を一般化することは難しい。しかし、選択のあり方やその葛藤を事例的に記述したことで、女性臨床心理士のキャリア選択におけるモデル、参照枠を提示することができた点は、本研究の意義である。

今後は、より事例を増やし、キャリア選択における共通要因、阻害要因、促進要因を検討していくことが必要だろう。また、望み通りのキャリアを選べなかった場合、自らの希望がわからなくなった場合についての検討も求められる。

引用文献

- 浅原知恵・橋本貴裕・高梨利恵子・渡邊美加 (2016). 心理臨床家の専門性とは何か. 心理臨床学研究, 34, 377-389.
- 柏木恵子 (2015). なぜ日本の母親に育児不安が強いのか? 日本の親子 不安・怒りからあらたな関係の創造へ. 平木典子・柏木恵子 (編著).
- 広辞苑 第五版 岩波書店
- 高橋美保・石津和子・森田慎一郎 (2015). 成人版ライフキャリア・レジリエンス尺度の作成. 臨床心理学, 15, 507-516.
- 山口慶子・岩壁茂 (2012). 母親であることと心理臨床家であること. 心理臨床学研究, 29, 728-738.

付記

本研究は、平成30年度奈良女子大学機能強化費 (研究) 執行組織：こころとからだの健康プロジェクトの助成を受けて行われた。